

発掘された弥生の鉄器づくり～石の道具と鉄の道具、意外な共通点とは？～

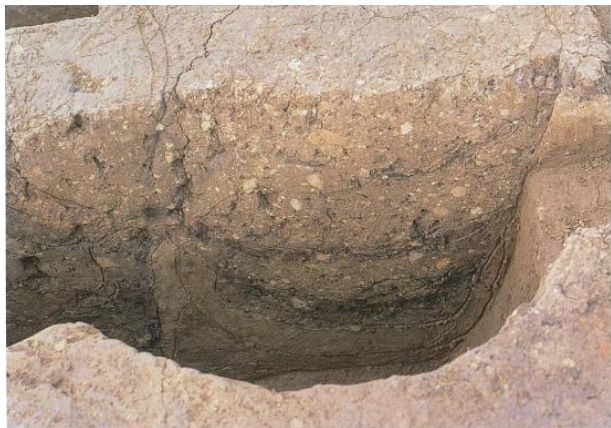
(松江市・上野遺跡) 真木大空

来年で 30 周年を迎える埋蔵文化財調査センターですが、わたしは設立当時まだ生まれていない、今年で就職して 3 年目の職員です。就職して初めて調査した遺跡では弥生時代の集落跡を発見しました。そこで鉄器が出土し、弥生時代の鉄器づくりに調べる機会がありましたので、今回は弥生時代の鉄器づくりをテーマに埋蔵文化財調査センターの過去 30 年の調査を振り返りたいと思います。

みなさん、普段朝起きてからどのように生活しているでしょうか。包丁で切った野菜、フライパンで焼いた目玉焼き、朝食を終え、いつものように車で出勤します。気が付けば、私たちの身の周りには鉄で作られた道具であふれています。今、私たちにとってそれは当たり前ですが、もしもそれを作れと言われたら？それができる人はあまりいないでしょう。今から約 2,300 年前、日本に初めて鉄が伝えられた時、当時の人々はどんな風に鉄の道具を作っていたのでしょうか。

今から約 20 年前、松江市宍道町の上野Ⅱ遺跡では、弥生時代後期（今から約 1,800 年前）の集落跡が調査されていました。約 10 棟の竪穴式建物が発見され、弥生人の生活の様子が少しずつ明らかになってきた時です。いくつかの住居の床に焼けて赤くなった部分や

炭の粒が溜まって黒くなった部分があることに気がきました。そして、その周りからは鉄の矢じり、長方形の板、変な形の小さな鉄の破片が出土します。一体これは何でしょう。実は、これが弥生人の鉄器づくり工房発見の瞬間でした。ここから想像される当時の鉄器づ



鍛冶炉の断面

保温のために炭と土が交互に積み重ねられています

くりはすごく単純なものです。薄い板のような鉄の素材を朝鮮半島や中国から輸入し、熱を加えながらタガネで切り取り、石の道具でたたいたり削ったりしながら鉄の道具を作っていた。つまり、弥生人は伝統的に行ってきた石器づくりとほとんど同じやり方で鉄器を作っていたのです。

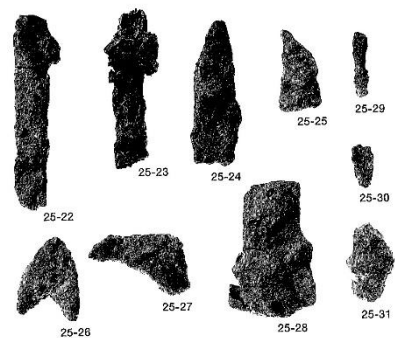
しかし、作る技術は変わらなくても出来上がった鉄の道具はそれまでの石の道具に比べて格段に優れていました。実験では、石の斧に比べて鉄の斧は4倍のスピードで木を伐採できるといった結果も出ています。さらに鉄は耐久性に優れ、切れ味が悪くなれば研ぎ直して何度も再生させることもできます。初めて鉄を手にした弥生人はその便利さに驚いたことでしょう。こうして、弥生時代には矢じり、木を削るためのヤリガンナ、刀子（ナイフ）、斧、鎌などさまざまな鉄の道具が生み出されました。

鉄器づくりはどの集落でも行われていたわけではなく、調査から約20年たった現在でも、島根県内で弥生時代の工房は4か所ほどしか見つかっていません。また、弥生時代の遺跡を調査すれば必ず鉄器が見つかるわけでもありません。弥生人にとって鉄はまだ貴重品だったようです。

その後、時代は変わって古墳時代の終わり頃には砂鉄や鉄鉱石から鉄そのものを作り出す製鉄技術が伝わってきます。こうして発展してきた鉄・鉄器づくりが今の便利な生活につながっています。そのはじまりは弥生人の地道な努力によってもたらされたのです。弥生人の試行錯誤から2,300年。

私たち埋蔵文化財調査センターの職員は、今日も発掘調査現場で汗を流しています。鉄で作られたスコップや鍬を使って、、、

(島根県埋蔵文化財調査センター 調査第一課 主任主事)



下段右から2番目が素材と考えられる鉄の板、その左が切り取られた鉄の破片、一番左が完成したやじりです。